

## D-11 意図的受胎の効用性

### —(1)風疹によると思われる心身障害児の出生から—

沖縄女短大 国吉 静子

1. 1964年から65年にかけて沖縄で風疹（三日はしかと呼ばれていた）が大流行した。その後、風疹によると思われる心身障害児が384名出生し、その年度の半年間の出生数約1万に対し、約3%の比率を示している。その要因の多くは、母親が妊娠していながら、妊娠していることを知らずにいたということである。つまり受胎から人間として形づくられる胎芽期を意識していないところに問題点を見出した。

生命の誕生は、受精の日を出発点としているだけに夫婦の健康状態、精神状態、経済状態、生まれる時期、家族の期待のもとに選ばれる生命の誕生でなければならないはずである。意図的受胎によって、それらの効用性を高める事は科学的に可能である。

2. 今回は日本政府派遣検診班の実態報告を資料とし考察を進めていく。

3. 今回の風疹による資料だけでなく、沖縄における心身障害者数、要因、施設、経費等を調査し、母子衛生の状態等を関連づけて結果をまとめる。したがって、今回の発表は、風疹によると思われる心身障害児の出生について実状を報告し、今後の研究の糸口にしたい。